

1 大会概要

今大会は5月30日(土)から6月14日(日)までの15日間にわたり開催された。計44チーム(プレミアEAST:1校、プリンス関東2部:1校、県リーグ所属:21校、各支部代表:21校)が、1つの県代表枠をかけて40分ハーフ・延長20分・PK方式によるトーナメント戦を争った。プレミアリーグEAST所属の昌平高校は4回戦から、プリンスリーグ関東2部所属の西武台高校、および関東大会出場の聖望学園高校・武南高校は3回戦からの出場となった。準決勝以降はNACK5スタジアム大宮を舞台に、天候にも恵まれた素晴らしい環境の中で大会が実施された。

2 大会結果

優勝 昌平高校(3年連続7度目)

準優勝 西武台高校

第3位 正智深谷高校・浦和学院高校

3 大会全般(傾向と特徴)

ベスト8以降の試合はすべて2点差以内、準決勝以降は1点差での決着となり、上位校の実力は伯仲していた。その激戦の中で、決勝のカードは3年連続で同カードとなり、昌平高校が3年連続で代表の座を掴んだ。同校は、主戦場とするプレミアリーグEASTにおいて2勝3分6敗の10位と苦戦が続いており、今大会も主力を数名怪我で欠く陣容であったが、難敵を相手にしっかりと勝ち切る「絶対王者」としての底力を改めて見せつけた。

ベスト4進出校の特徴として、攻守において明確な狙いを持ち、それを実行できる高い技術と走力を備えている点が挙げられる。守備面では、ミドルゾーンにブロックを形成し、意図的に前向き状態でボールを奪ってカウンターへ移行する戦術が多く見られた。また、あえて相手にロングボールを蹴らせ、それを回収する方法も見られた。これらを成立させる要因として、上位校には対人守備や空中戦に強い、極めて守備能力の高いセンターバック(CB)が揃っていた。攻撃面でもCBがビルドアップの中心となり、ショートパスとロングボールを織り交ぜた多彩な前進方法を持つチームが勝ち上がった。アタッキングサードにおいては、個の突破力だけに頼るのではなく、相手サイドバックを釣り出した背後の「ハーフライン」を意図的に活用する動きや、サイドから中央への斜めのパスを差し込み中央から突破するなど、サイドを起点とした組織的なコンビネーションプレーでゴールに迫るシーンが目立った。

一方で、セットされた相手の守備網に対して安易にボールを入れ、ロストする場面も散

見された。今後は、CB やボランチによる有効なサイドチェンジを活用し、「前進・崩しを試みるか否か」の状況判断の精度をさらに上げることが求められる。ピッチを広く使って相手の守備陣形を意図的に引き延ばし、スペースを作り出す回数を増やすなど、安定して攻撃の局面を移行させることが今後の課題と言える。

総じて、現代サッカーにおいて攻守の起点となる CB の重要性は、今後さらに増していくと感じさせる大会であった。

4 チーム分析

〈優勝 昌平高校〉

決勝までの3試合すべてで異なる先発陣容であったが、陣形は共通して「1-4-2-3-1」を採用した。ビルドアップの局面ではCB 2枚とボランチ 2枚の4人でボールを保持。前線では⑨立野や⑪島田、⑩飯島を中心とした前線の4人が常に相手のライン間や裏抜けを狙う構造をとった。両サイドバックは上下動を繰り返し、前線への加勢からビルドアップのサポートまで多様なタスクを担った。SB②高見澤は上下動だけでなく内外のポジショニングを使い分け、相手守備の狙いを狂わせた。また左右のSBをこなす⑥松本は、高い位置を取って積極的に攻撃へ関与。決勝戦では両サイドハーフとしても起用され、2得点を挙げるなど、高い攻撃力を見せた。ショートパスでのビルドアップに固執せず前線の⑨立野へロングボールを送り、そのセカンドボールを回収して前進を図る形や、3回戦（成徳深谷戦）で多く見られた相手のハイプレスを裏返す GK⑬服部の高精度のロングフィードなど相手の出方や時間帯に応じたビルドアップの方法も多彩であった。相手のプレス背後のスペースを使う動きがうまく、ボランチ⑮屋宜がワンタッチプレーを含めて長短のパスで効果的にボールを配球した。攻撃の主軸となったのは両サイドハーフ（SH）のハーフラインでのプレーと連動したサイド攻撃である。両SHが内に絞りハーフラインでプレーすることで、中盤背後のライン間でボールを引き出した。また「SH・SB・トップ下⑩（もしくはFW⑨）」の3枚による流動的なサイドローテーションを展開し、つり出された相手SBの内側や背後のスペースを突く組織的なサイド攻略からゴールに迫るシーンが多かった。アタッキングサードでは⑩飯島や⑪島田が果敢なドリブルで相手ゴールへ迫り、決定機を演出し続けた。中央エリアに厚みを持たせて選手を配置していることで、ボールロスト後のシームレスな再回収を可能にし、二次攻撃、三次攻撃へつながる分厚い攻撃を生み出した。守備の局面でもボールホルダーへの1stディフェンダーの素早いアプローチと、それに連動した強固な「チャレンジ&カバー」の形成により、終始アグレッシブにボールを奪いに行く守備で攻守にわたり主導権を握る時間が多かった。

〈準優勝 西武台高校〉

「1-4-1-4-1」を基本陣形としながらも、相手に応じて「1-4-2-3-1」や「1-4-4-2」へと移行し、「良い守備から良い攻撃」を体現する戦術的な幅をもつチームである。守備時はミド

ルゾーンにコンパクトなブロックを形成。FW や SH を含めた全員がハードワークを徹底し、強固な「チャレンジ&カバー」から意図的に前向き状態でボールを奪取し、ショートカウンターへと繋げた。相手のロングボールに対しても、CB⑤遠藤や⑥唐崎が跳ね返し、ボランチがセカンドボールを徹底して回収した。攻撃面ではボールを安定して保持し、ショートパスによるビルドアップを狙う。相手の背後にスペースを認知すれば、CB⑥唐崎の左足、RSB②古川の右足から放たれる高精度なフィードで一気にロングボールを活用して前進する場面もあった。中盤では、ボランチ⑩高橋が豊富な運動量でビルドアップをサポートし、前線へクオリティの高いフィードを供給。さらに、⑩高橋は2列目からの果敢な飛び出しでラインブレイクを狙うなど、豊富な運動量で攻守にわたりゲームの中心として機能した。また、同じく攻守の柱となったのがCB⑥唐崎である。彼の長短パス、粘り強いディフェンス、そして要所を締める対人能力の高さは、大会を通じて傑出していた。崩しの場面では、素早いサイドチェンジで相手陣形を揺さぶり、両SHの突破力を活かす攻撃が効果的であった。特にLSH⑪田邊の鋭い仕掛けは、常に相手ディフェンスの脅威となり続け、チームの貴重な推進力となっていた。

〈第3位 正智深谷高校〉

基本システムは「1-4-4-2」。守備時は両SHが中央へ絞り、ミドルゾーンで強固なブロックを形成する。中央を封鎖することで相手にロングボールを強い、空中戦に絶対的な強さを誇るCB④岸田、LSB③青木らが確実に跳ね返す意図的な守備を展開。ボランチ⑦渡邊もボール奪取力が高く、チーム全体の守備意識の高さ、高い走力、空中戦の強さ、対人での強度を武器に、非保持の局面においてもゲームの主導権を握り続けた。攻撃面では、RSB②小寺やMF⑥田中からの高精度な長短のパスを、最前線のFW⑨藤原ら2トップへ配球。圧倒的なキープ力とゴールへの推進力を見せる⑨藤原を起点に、相手ゴールへ迫った。2列目では、SH⑩廣間が高いスキルを活かしたキープと鋭い突破で攻撃を活性化。さらに、ベンチから投入されるMF⑭岩谷やSH⑧岩谷らも技術水準が極めて高く、即興性のあるプレーでゲームチェンジャーとして相手の脅威となった。キャプテンCB④岸田の空中戦の強さ、対人の強さ、FW⑨藤原のキープ力、ゴールへの推進力はこの舞台でも際立っており、今後のさらなる飛躍を期待したい。

〈第3位 浦和学院高校〉

高いスキルを有した選手が多く、3バック・4バックを併用し、中央の選手たちが流動的に動き回りパスを引き出し、長短のパスで相手のプレスの背後を狙うなど、多彩な攻撃を見せた。MF⑦西田をはじめ、前線はテクニクレベルが高いタレントがそろっており、その爆発的な攻撃力を生かすべく守備時にはあえて「1-4-2-4」の形でロングボールを誘い、強力アタッカー陣をできるだけ前線に残すことで、最大限その強みを生かす工夫が施されていた。それを可能にしたのはCB⑤北山の存在である。圧倒的な空中戦の強さと、

ゴール前で身体を張る献身的なディフェンスがあったからこそ、前線の破壊力を維持し続けることが可能となった。さらに、デザインされたセットプレーも複数用意されており、どの局面からでもゴールを陥れることができる、極めて攻撃的で魅力溢れるサッカーを展開した。

5 最後に

代表校となった昌平高校は2年前の全国チャンピオンでもある。令和6年度に続き2度目の全国優勝を飾れることを埼玉県民一同期待したい。